

曾我敵討事件に関する一考察

——『吾妻鏡』建久四年五月廿八日条の検討を中心に——

坂井孝一

はじめに——研究史の検討と課題の設定——

建久四年五月廿八日、富士野の巻狩に際して、曾我十郎祐成・五郎時致の兄弟が工藤左衛門尉祐経を殺害し、実父河津三郎の敵を討った事件はよく知られた歴史的事実である。その勇壮にして悲劇的な兄弟の姿は人々の心を打ち、事件の直後から「曾我語り」として伝承されたという。そして、鎌倉末期には「真名本曾我物語」、南北朝・室町期には「仮名本曾我物語」が著されて、曾我敵討事件は次第に国民的文学として享受されるようになっていく。一方、室町期、能や幸若舞においても曾我兄弟を主人公とする作品が生まれ、江戸期に至ると歌舞伎にも同様の作品が作られて、曾我敵討事件は「曾我物」としても国民的に愛好されるようになる。

さらには、学問研究の世界でも曾我敵討事件は重要な位置を占めてきた。「曾我語り」をはじめ、真名本・仮名本など各種の『曾我物語』、能・幸若舞・歌舞伎の「曾我物」は、いずれも民俗学・国文学・芸能史などの諸分野において重要な研究対象となってきたのである。ただ、唯一歴史学の分野においては必ずしも研究が盛んであったとは言えない。そこ

には、文学・伝承・芸能などに対し、歴史事実を解明する史料的な価値を文書・記録類ほどには認め難いとする、伝統的な歴史学の方法論の問題があったことも確かである。しかし、曾我兄弟の敵討は歴史上の事実であり、しかも後世に多大な影響を及ぼした事件である。また、鎌倉末期の編纂物とは言え、鎌倉時代の根本史料の一つとされる『吾妻鏡』に詳細な記述の見られる事件でもある。さらに言うならば、歴史研究の方法論の上でも、近年、文学・民俗学・考古学・美術史学など周辺の諸学問の成果を積極的に取り入れて、より充実した歴史像を構築しようという動きが活発化してきているのである。とすれば、歴史学の分野においても、曾我敵討事件に関する研究を本格的に行う時期に來ていると言わなくてはならないであろう。本稿は、こうした意図のもと、曾我敵討事件について『吾妻鏡』の記事の検討を中心に考察するものである。

さて、具体的な考察に入る前に、研究史を整理し問題点を指摘しておきたい。しかし、国文学・民俗学⁽¹⁾の研究には膨大な蓄積があり、そのすべてに触れることは到底出来ない。そこで、『真名本曾我物語』(以下、『真名本』と略す。またとくに断らない限り、現存の『真名本曾我物語』を指すこととする)の研究のうち、『吾妻鏡』との関係に論究しているものに限定して述べてみたい。代表的なものに角川源義氏・福田晃氏の研究がある。

角川氏は、事件後ほど遠からぬ頃、箱根山に住していた大夫坊覚明によって先ず原『曾我物語』が編述され、そこに伊豆山密厳院の安居院流の唱導家の手が加わって、文永年間以前に中間的な第一次の『真名本』が成立し、さらにその後、物語を管理した時宗教団の手によって怨霊思想が盛り込まれ、二次的な真名本である現存の『真名本』が成立したとされる。氏の説の特長は、『曾我物語』を成長する物語として捉えている点である。そして、このいくつかの物語のうち『吾妻鏡』の原史料となったのは、『中間的真名本』であったとされている⁽²⁾。

これに対して福田氏は、『吾妻鏡』に見える曾我敵討譚が、富士野の巻狩における敵討と兄弟の最期に重点を置いたものであることから、その原史料は、生涯に及ぶ兄弟の悲劇を浪漫的に叙述する「物語」ではなく、富士の裾野における兄

弟の敵討を中心に、事件を比較的客観的に叙述した「曾我記」或いは「曾我兄弟の富士の敵討の記」と称すべきものであったと主張され、角川氏の『中間的真名本』説を否定されている⁽³⁾。

では次に、歴史学の分野の研究について見てみたい。主なものとしては三浦周行氏・石井進氏・五味文彦氏の研究がある。いずれも歴史学の研究者らしく、『真名本』に対してだけでなく『吾妻鏡』に対しても考察を加えている。とくに三浦氏は、『吾妻鏡』の曾我五郎元服の記事から、兄弟の敵討の背後に北条時政の影を想定され、後の研究に大きな影響を与えた。石井氏・五味氏も基本的にはこの説に従っており、『吾妻鏡』『真名本』がともに北条氏の主導下で作られたということを重視されている。

以上、極めて簡単にではあるが、『吾妻鏡』に論究している先行研究について整理してみた。いずれもすぐれた研究であるが、本稿は福田氏の説に魅力を感じる。というのは、氏の言われるごとく、『吾妻鏡』の曾我関係の記事は『曾我物語』の全容に及ぶものではなく、富士野の巻狩に集中して現れるからである。また、現在の『吾妻鏡』研究では、頼朝・頼家・実朝三代の「將軍記」の編纂を文永以前、頼経・頼嗣・宗尊親王「將軍記」の編纂をそれ以後とは考えず、すべて鎌倉末期の編纂としている。とすると、角川氏の『中間的真名本』文永以前成立説はその論拠を失うことになり、再検討の余地が出てくるのである。しかし、『頼朝將軍記』が他の「將軍記」と違って、幕府に伝来した文書・記録類だけでなく物語類をも原史料に用いて編纂された特異な「將軍記」であったこともまた確かである。そこで本稿は、『吾妻鏡』の編纂に際し、福田氏の言われる「曾我記」のようなものが原史料に用いられたということを前提として、論をすすめることにしたい。

しかし、福田氏の研究にも問題点がないわけではない。それは曾我関係の記事を検討する際、『吾妻鏡』の他の部分の記事と切り離し、独立して扱う傾向が強いという点である。これでは、曾我関係の記事がどのような位置付けを持ち、原史料たる「曾我記」がどのような扱いを受け、ひいては記事の中のどの部分が史実で、どの部分が文学的虚構によるもの

なのかということが不明瞭になってしまう。これは、他の研究の場合も同様である。いずれも『吾妻鏡』及びその原史料と考えられる「曾我記」について、史料批判が不十分なままに考察を進める傾向が見られるのである。そこで本稿は、曾我関係の記事が、『吾妻鏡』の他の部分と比較してどのような特徴を持っていたのか、そこには原史料の「曾我記」のどの部分が反映されているのか、言い換えるならば、『吾妻鏡』の編纂者は「曾我記」を原史料としてどのように利用したのか、という点を明らかにすることを第一の課題とし、次いで「曾我記」の史料としての価値、すなわち歴史事実をどれだけ正確に伝えているかという信憑性について明らかにすることを第二の課題としたい。本稿は、したがって、曾我敵討事件に関する史料論という意味を有することになる。では、次章以下において、『吾妻鏡』の記事の具体的な検討に入ることにしたい。

第一章 『吾妻鏡』建久四年五月廿八日条

第一節 記事の位置付けと構成

まず、五月廿八日条の位置付けを『吾妻鏡』の記事によって、また随時『真名本』を対照しつつ確認しておこう。建久三年七月、征夷大將軍に任ぜられた源頼朝は、翌建久四年、後白河法皇の一周忌の仏事を終えると、三月下旬から四月下旬にかけて、「下野国那須野・信濃国三原等狩倉」で大々的な御狩を催し、ついで五月八日、「為覽富士野・藍澤夏狩」に駿河国に進發した。これら一連の大規模な狩猟は、征夷大將軍の地位に就いた頼朝が、軍事政権の首長としての自らの權威・権力を誇示するとともに、統治者としての資格を神に問うという目的で行った、極めて政治的・神事的色彩の濃い儀式であった。

五月十五日、藍澤の御狩を終えて「富士野御旅館」に入った頼朝は里見冠者義成を「遊君別当」に任じ、「手越・黄瀬河已下近辺遊女」を集めて終日酒宴に及んだ。敵討の当夜、工藤祐経・王藤内の傍らに侍っていたとされる遊女「手越少将」「黄瀬河之亀鶴」も、その日の酒宴に参じていたかも知れない。

翌十六日は、頼朝にとって喜ばしい一日となった。「若君」頼家が初めて鹿を射止めたのである。「折節候近々」じ、鹿を「追合」わせた愛甲三郎季隆は、その功によって優賞された。「真名本」ではこの一件は、二人対抗形式の「二十番の巻狩」という華やかな場面の直前に配され、畠山重忠の嫡子六郎重泰が頼家の「御合手」をつとめたことになっている。この日の御狩はこれによって中止となり、晩には「山神」を祭る「矢口の祭」が行われた。頼家が鹿を射た場に伺候していた者のうち、「可然射手」三人すなわち工藤庄司景光・愛甲三郎季隆・曾我太郎祐信が召し出され、「矢口餅」を「山神」に供えた。餅の「陪膳」役には、梶原源太左衛門尉景季・工藤左衛門尉祐経・海野小太郎幸氏の三人が当たった。ちなみに、この記事は「真名本」にはない「吾妻鏡」独自のものである。

ついで廿七日、未明より勢子等を催し立て終日御狩が行われた。この中で「工藤景光の怪異」と呼ばれる事件が起こる。すなわち、長老の一人工藤景光が、弓手の獲物「無双大鹿」を三度までも射はずしてしまったのである。これも「真名本」にはない「吾妻鏡」独自の記事である。景光は、この鹿を「山神駕」に疑いなく、自分の運命も縮まったと述べ、人々も不思議に思っていたところ、彼は晩に病を發して倒れてしまった。これを見て頼朝は、御狩を止め還御するべきかと諮問したが、宿老等が還御の必要なしと答えたので、翌廿八日から七日間の巻狩が行われることになった。そして、その廿八日の夜、曾我兄弟による敵討事件が発生したのである。

では、五月廿八日条の記事を次に挙げてみよう。やや長くなるが、中心となる史料なので全文を引用したい。また、論述の必要上、文中に(A)・(E)の記号を付す。

①(A) 小雨降、日中以後霽、子刻、故伊東次郎祐親法師孫子、曾我十郎祐成・同五郎時致、致推参于富士野神野御旅

館、殺戮工藤左衛門尉祐経、(B) 又有備前国住人吉備津宮王藤内者、依与于平家家人瀬尾太郎兼保、為囚人被召置之處、属祐経謝申無誤之由之間、去廿日返給本領帰国、而猶為報祐経之志、自途中更還来、勸盃酒於祐経、合宿談話之處、同被誅也、(C) 爰祐経・王藤内等所令交会之遊女、手越少将・黄瀬河之龜鶴等叫喚、此上祐成兄弟討父敵之由発高声、依之諸人騒動、雖不知子細、宿侍之輩者皆悉走出、雷雨撃鼓、暗夜失燈殆迷東西之間、為祐成等多以被疵、所謂平子野平右馬允・愛甲三郎・吉香小次郎・加藤太・海野小太郎・岡辺弥三郎・原三郎・堀藤太・白杵八郎、被殺戮宇田五郎已下也、十郎祐成者、合新田四郎忠常被討畢、五郎者差御前奔参、將軍取御劔、欲令向之給、而左近將監能直奉抑留之、此間小舍人童五郎丸擲得曾我五郎、仍被召預大見小平次、(D) 其後靜謐、義盛・景時奉仰、見知祐経死骸云々、

(E) 左衛門尉藤原朝臣祐経

工藤瀧口祐経男

すなわち、廿八日の深夜、故伊東次郎祐親の孫、曾我十郎祐成・同五郎時致の兄弟が、「富士野神野御旅館」で工藤左衛門尉祐経を殺戮したのである。「又」、備前国の住人、吉備津宮王藤内も同じく殺された。彼は平家の家人瀬尾太郎兼保に味方した咎により囚人として鎌倉に召し置かれていたが、祐経の尽力で「返給本領」わり、「去廿日」帰国の途にいたばかりであった。しかし、途中から引き返して祐経と宿を共にし談話していたため、この難に遭ったのである。「爰」に、祐経・王藤内の傍らに侍っていた遊女手越少将・黄瀬河之龜鶴等が悲鳴をあげ、その上兄弟も「討父敵」ったと「発高声」したので、「諸人騒動」となった。詳しい事情が分からないまま宿侍の武士達は皆走り出たが、折節「雷雨」が「撃鼓」つごとく激しく降り注ぎ、「暗夜」に「燈」もないという状況だったので、平子野平右馬允・愛甲三郎・海野小太郎等十人以上の者が殺傷されてしまった。やがて、兄の十郎は新田四郎忠常と戦って討たれ、弟の五郎は頼朝の「差御前奔参」った。「將軍」頼朝は「欲令向之給」したが、側近の御家人大友左近將監能直が「抑留」めた。この間に

小舎人童の五郎丸が五郎を搦め捕らえ、その身柄は大見小平次に召し預けられることになった。「其後」静謐に帰したので、和田義盛と梶原景時が頼朝の命を受けて「見」知祐経死骸」した、というのである。

では、以下に、この記事の構成について検討してみたい。まず、全体が長い本文(A)と短い最後の特筆部分(E)とに分けられているという点が注目される。そして本文は、中程の「爰」という接続語によって大きく前段(A)・(B)と後段(C)・(D)とに分けられている。「吾妻鏡」において「爰」という接続語は、話題を転換したり、より詳しい叙述を展開したりする際にしばしば用いられる。先に触れた「工藤景光の怪異」についての五月廿七日条でも、終日御狩が行われたという一般的な記事の後、「爰」という語をはさんで景光の話をもっと具体的に叙述している。廿八日条でも、「爰」より前の(A)・(B)では、曾我兄弟が工藤祐経・吉備津宮王藤内を殺戮したという事実が淡々と記されているのに対し、(C)・(D)では喚き叫ぶ遊女、雷雨の降りしきる暗夜、次々と疵を被り殺された武士達(所謂「十番斬」、十郎が討たれた後も頼朝の屋形めがけて走る五郎、これに立ち向かうとする頼朝、これらの様子が一種の緊迫感をもって叙述されている。

さらに前段は、「又」という接続語によって、工藤祐経の殺戮という敵討事件の核心部分(A)と、はからずも難に遭った王藤内に関する説明の部分(B)とに分けられている。また後段は、兄弟が殺傷を繰り広げた動的な場面(C)と、侍所の別当・所司である和田義盛・梶原景時が祐経の死骸を見知する静的な場面(D)とに分けられ、これが「其後」という語によってつながり合わされるという構成になっている。

一方、最後の特筆部分(E)には、祐経の姓名・出自・官職が本文とは全く異なった形式で記されている。こうした形式は、他にも源義経・北条時定・安田義貞・安田義資・佐々木定重などの例があり、重要人物や横死した人物の姓名・出自・官歴を特筆するのは『吾妻鏡』の基本方針であったと思われる。⁽⁹⁾すなわち(E)は、『吾妻鏡』の編纂者が史書としての体裁を整えるため、編纂時に追記した部分であると考えることが出来るのである。

以上が五月廿八日条の構成である。その性格は、概して前段(A)・(B)に実録への指向性が強く、後段(C)・(D)に文学的傾向が著しい。また、特筆部分(E)は編纂時の追加である可能性が高い、とまとめることが出来る。次節では、もう少し詳しく各部の文章表現・用語法・表記法などについて検討してみよう。

第二節 記事の性格と編纂方法

先ず、(C)の文章を『真名本』の文章と比較してみたい。この部分は『真名本』巻九の後半に相当するが、そこではたとえば、次のような文章が見られる。

②非^(ヌ)佐^(サ) 御内^(ミ)入^(ニ)夜討^(ヤ)、是^(シ) 程^(チ)至^(ス)狼藉^(ロウジツ)何^(ナニ) 不^(フ)知^(チ)、无^(ム)下侍共哉^(ゲ)、留^(ル)耶^(ヤ) 放^(ハ)大音^(ダイオン)呼^(コ)、武蔵^(ムサシ)国^(クニ)住人^(ニタマフ)大楽^(ダイラク)彌^(ミ)平馬^(ヘイバ)允聞^(インブン)付^(ツ)、(中略) 此人^(コノヒト)共^(トモ)不^(フ)知^(チ)敵^(テキ)耶^(ヤ)、夜討^(ヤ)者^(モノ)在^(アル)何^(ナニ)、是^(シ) 言^(コト)云^(イフ)誰^(タレ)處^(トコロ)、十郎^(ジュロウ)走懸^(ソウケン)、臆^(オソレ)君^(キミ)詞^(コトバ)哉^(ナニ)、曾我^(ソウガ)冠者^(カウシャ)原^(ハラ)親^(サトウ)敵討^(テキウチ)宮藤^(ミヤフジ)左衛門^(サエモン)尉助^(ヱサク)経^(キヨ)出^(デ) 不^(フ)知^(チ)云^(イフ)任^(マカ)平^(ヘイ)太刀^(タチ)追懸^(ツケケン) (中略) 侍共^(サマトモ)聞^(キコ)之^(ノ)皆騒^(モトモツ)合^(アヒ)、一二千^(ヒトニサカ) 家^(イヘ)屋形^(ヤカ)々々^(ゾゾ)上下^(ジョウゲ)人共^(ヒトトモ)、(中略) 旬^(ツキ)旬^(ツキ) 声^(コエ)々^(ゾゾ)相連^(アヒル)、山麓^(サンロク)峯^(ミネ)谷^(タニ)響^(ヒビク)亘^(ヒトス)、不^(フ)異^(ヘ)六種^(ロクシュ)震動^(シンドウ) (傍線部は筆者による。以下の傍線部についても同じ)

この「大音を放て呼びければ」「曾我の冠者原が親の敵を討て出づるをば知らずや」の箇所は、(C)の「祐成兄弟討父敵之由発^ニ高声^ニ」という箇所に、「侍共これを聞て皆騒ぎ合へり」の箇所は「依^レ之諸人騒動」の箇所に、「此の人共をば敵とも知らざりけるにや」「一二千家屋形々々上下人共(中略)ののしりける声々相連きて」の箇所は「雖^レ不^レ知^ニ子細^ニ、宿侍之輩者皆悉走出」の箇所にそれぞれ対応することがわかる。これに続く「十番斬」の人名も、〈表1〉に示したごとく、(C)・『真名本』ともにほとんど同じである。のみならず、人名表記の方法という点でも、『真名本』の「愛甲三郎行氏」を唯一の例外として、実名を記さないという共通点が見られる。

また、『真名本』の「十番斬」の直後には、次のような文章が記されている。

③比^ハ五月廿八日^の夜半^の事^ハ、雨^ハ居^ハ々^ハ暗^ハ々^ハ、此等^ハ二人^ハ、只今^ハ寝^ハ臆^ハ起^ハ拳^ハ、踵^ハ行^ハ中^ハ昇^ハ綜^ハ、向^ハ打^ハ支^ハ渡^ハ、懸^ハ切^ハ、普通^ハ打^ハ行^ハ、不^ハ知^ハ其^ハ数^ハ被^ハ切^ハ

この「雨は居(沃)に居てふる、暗さは暗し」「只今寝おびれて起き挙げりつつ、あはて行きける」という表現は(C)の「雷雨撃鼓、暗夜失燈殆迷東西」という箇所、「その数を知らずぞ切られける」は「為枯成等多以被疵」に極めて類似していると言えよう。

さらに、五郎が頼朝の屋形に走り入った場面は次のように描かれている。

④鎌倉殿被^テ聞^ル食^ハ、无^ニ下^ニ侍^ハ共^ハ哉^ハ、何^ハ加^ハ様^ハ御^ハ前^ハ近^ハ仕^ハニ^セ狼^ハ藉^ハ、御^ハ腹^ハ卷^ハ取^ハ御^ハ帶^ハ刀^ハニ^セ仕^ハニ^セ樋^ハ出^ハ處^ハ、大^ハ伴^ハ左^ハ近^ハ將^ハ監^ハ義^ハ直^ハ候^ハニ^セ稠^ハ者^ハ、取^ハ留^ハ進^ハ、君^ハ乍^ハ居^ハ隨^ハニ^セ日^ハ本^ハ国^ハ候^ハ、云^ハ无^ニ甲^ハ斐^ハ私^ハ事^ハ争^ハ可^ハ碎^ハ手^ハ侍^ハ共^ハ候^ハニ^セ太^ハ多^ハ不^ハ申^ハ了^ハ、御^ハ馬^ハ屋^ハ小^ハ平^ハ次^ハ樋^ハ参^ハ

この「鎌倉殿聞こしめされて」「御腹巻に御帶刀を取て、つと出でむとせさせ給ふ」も、(C)の「將軍取御劔、欲令向之給」に、「大伴左近將監義直とて稠者にて候ひけるが、取り留め進せて」は「左近將監能直奉抑留之」にまさに酷似している。以上の例からわかるように、(C)は「真名本」と極めて類似した文章表現・表記法を用いている。これは、(C)が「真名本」と同じ原史料に基づいて記されたことを示唆するものである。

一方、(D)の和田義盛と梶原景時による死骸の見知に対応する文章は「真名本」にはない。死骸の見知自体についても、兄弟が祐経にとどめをさした時点で「さてこそ後日の實見の時は、口を割かれたりける耶と沙汰は有りけれ⁽¹⁰⁾」という具合に簡単に触れているだけである。そもそも「真名本」では、和田義盛・畠山重忠を兄弟の庇護者、これに対して梶原景時・景季父子を兄弟の敵対者と設定しているため、義盛と景時が共同して行動することはないのである。しかし、この二人は侍所の別当・所司であって、現実にはその職務の遂行のため行動をとることが多かったはずである。つまり、内容的には(D)はむしろ実録的なのである。とすれば、時間の経過に従って(C)・(D)ひとつづきに叙述されてはい

るが、この両者は異なった原史料に基づいて記述されたと考える方が妥当であろう。要するに、(C)の部分は『真名本』の原史料となった「曾我記」によって、また(D)の方は幕府に残されていた何らかの記録によって作られたとみなすことが出来るのである。

残念ながら現時点では、(D)の元となった記録がどのような性格のものであったのか、確定することはできない。しかし、那須野・三原・藍澤・富士野という一連の御狩は、頼朝の將軍就任後、初の大規模な政治的・神事的儀式であり、多数の御家人が参加した一大イベントであった。必ずや幕府関係者による記録も残されたであろう。また、それらがすべて散失して、『吾妻鏡』編纂者の手元には一切伝わらなかったということも考え難い。なぜなら、『吾妻鏡』には、『真名本』とは異なる内容の、しかも結果のみを簡潔に記した実録風の記事が随所に見られるからである。そして、その種の記事をつなぎ合わせていくと、建久四年の御狩に関する一種の「部類記」のようなものが出来上がる。『吾妻鏡』の編纂者が利用したのは、この種の記録だったのではないだろうか。周知のごとく、『吾妻鏡』の編纂が始まる以前にも、幕府によってたびたび古記の調査や整理が行われていた⁽¹¹⁾。したがって、その過程で「建久四年御狩部類記」のような記録が作られていても不思議はないのである。無論、現存しない史料をもとに想像で論理を組み立てるのは慎まなくてはならないが、本稿では一応、(D)の原史料としてこの種の記録を想定しているということを述べておきたい。

では次に、前段の(A)・(B)について検討してみたい。文章表現の上では、(A)・(B)ともに一見実録風である。しかし、より詳しく見ていくと、先ず(B)の方に不可思議な表現のあることに気付く。それは、「去廿日返給本領帰国」という表現である。この「去廿日」というのは五月廿日のことを指すと思われる。とすれば、それは富士野の御狩の最中ということになるから、「返給本領」った日ではなく「帰国」の日と解さなくてはならない。しかし、そうであるならば、どうしてそのような一個人の旅立ちの日付を『吾妻鏡』の編纂者が知ることが出来たのであろうか。もし、それが頼朝による裁許の出た日付であるならば、公的な裁判記録が幕府に残されていて、それを利用したのだと考えることも

可能である。しかし、「去廿日」を五月廿日と解する限り、それはあり得ない。王藤内自身が何らかの記録を残していたという可能性もないことはない。しかし、それが鎌倉末期まで保存されていて『吾妻鏡』編纂者の目にとまったということとは考えにくい。これらのことから、(B)は実録的な文献を原史料にして記述されたものではないと言わなくてはならないであろう。

それでは、先の(C)と同様、『真名本』の原史料の「曾我記」を用いて記されたのであろうか。『真名本』の中で(B)に対応するのは、巻八の次の部分である。

⑤ 與^(一)左衛門尉^(二)同宿^(三)候備前国^(四) 住人^(五) 貴備律^(六) 宮往藤内^(七) 今年^(八) 七箇年^(九) 間被^(一〇)召^(一一)込^(一二) 所領^(一三) 皆被^(一四)召^(一五)候^(一六)、適^(一七)免^(一八) 御勘当^(一九) 下者^(二〇) 餘^(二一) 追從^(二二) 自^(二三)神原^(二四)打還^(二五)、懸^(二六)我等^(二七) 手^(二八)一定^(二九) 失^(三〇) 者哉^(三一)

これは、十郎から、祐経と同宿している「往藤内(『真名本』では「王」を「往」と表記する)」のことを聞かされた五郎が「物哀気色」にて語った言葉である。その主旨は(B)と大差ないが、ここでは所領の没収期間を「今年まで七年間」引き返して来た地点を「神原(蒲原力)より」と特定している点が注目される。とくに「神原より打還りつつ」というのは、東国の地理に詳しい『真名本』ならではの表現である。これに対し(B)はこうした点には一切触れていない。そのかわり、所領没収の原因を「依^(一)与^(二)平家家人瀬尾太郎兼保^(三)」と具体的に示している。これは逆に『真名本』には見られない記述である。この相違は(B)と『真名本』とが相異なる原史料によって記されたことを示唆するものである。以上のことから、『真名本』の原史料となった「曾我記」とは別の種類の「曾我記」が存在し、(B)はその「曾我記」に基づいて記されたと考えることが出来るであろう。

では、(A)の方はどうであらうか。その文章表現は、いつ(「子剋」)、誰が(「曾我十郎祐成・同五郎時致」)、どこで(「富士野神野御旅館」)、何をしたのか(「殺戮工藤左衛門尉祐経」)という点を淡々と記したもので、まさに実録風である。さらにまた、(D)のところで見たように死骸の見知に関する何らかの記録があったと考えられる以上、当然その前提と

なる敵討そのものに関する記録もあったとみなくてはならない。とすれば、(A)の文章はそうした記録を元に作られたと考えるのが自然であろう。しかし、事態は思いのほか複雑である。というのは、ここは事件の核心部分に当たり、各種の「曾我記」にも詳しい叙述があったはずで、『吾妻鏡』の編纂者もそれを目にしていたと考えられるからである。そうした観点から(A)の文章を読み直すと、興味深い記述があることに気付く。それは、冒頭の「小雨降、日中以後霽」という天候に関する記述である。

日録という体裁をとる『吾妻鏡』において、各記事の冒頭に「晴」「霽」「陰」など天候に関する記述が置かれることは珍しくない。しかし、「頼朝將軍記」に限って言えば、それはむしろ異例なことに属する。事実、五月廿八日条の前後は勿論、御狩の記事全体を通してみても、この日以外に天候の記述は見られないのである。したがって、「小雨降、日中以後霽」という記述はいかにも唐突である。ちなみに、数少ない「頼朝將軍記」の天候の記述を持つ記事を分類すると、およそ次のようになる。すなわち、公家の日記を原史料にしたと思われる京都関係の記事⁽¹²⁾、二階堂行政の日記など幕府関係者の日記を原史料にしたと思われる記事⁽¹³⁾、鶴岡八幡宮の行事に関する記事⁽¹⁴⁾、北条政子の出産や北条泰時の元服など北条氏に関わる記事⁽¹⁵⁾、天変地異など自然現象を話題とした記事⁽¹⁶⁾、そして『平家物語』等の物語のエピソードと同一内容の記事⁽¹⁷⁾である。五月廿八日条の場合、京都・鶴岡・北条氏・天変地異とは無関係であるから、幕府関係者の日記か物語類を原史料にしたと考えるのが妥当であろう。前者であれば、(A)の他の部分の文章と違和感なくつながることは確かである。しかし、それにしては天候の記述があるのがこの日だけ、というのは不自然ではないだろうか。日記が原史料に用いられたとすれば、他の箇所にも記されていていいはずである。

では、後者の可能性はあるのだろうか。その場合参考になるのが平重衡と千手の前のエピソードである。『吾妻鏡』の重衡・千手の記事は、『平家物語』そのものか、『平家物語』と同一の原史料を元に作られたと考えられるが、それは天候の記述からもうかがえる。先ず「延慶本」巻十の該当箇所を挙げてみよう。

⑥其夜は雨打降たりけるに鹿野介家子郎等引具て酒持て参たり、千手前も琵琶琴持て参る、三位は寄臥給たりけるか起直ておはす（中略）鹿野介申しけるは兵衛佐殿より能々もてなし進せよと云蒙仰て候

『吾妻鏡』でこれに対応するのは、元暦元年四月廿日条の次の記述である。

⑦雨降、終日不休止、本三位中将依_レ武衛御免有_レ沐浴之儀、其後及_レ秉燭之期、称_レ為_レ慰徒然、被_レ遣_レ藤判官代邦通・

工藤一臈祐経、并官女一人^{号千手前}等於羽林之方（中略）祐経打_レ鼓歌今様、女房彈_レ琵琶、羽林和_レ横笛、

両者は、内容的に若干の相違が見られるものの、千手の前が重衡を慰めるために訪れたのが雨の降る夕刻であったという点では同じである。しかも、この重衡・千手の前のエピソードに関する限り、『吾妻鏡』における天候の記述は前後を通じてこの箇所だけであり、『平家物語』もその点はかわらないのである。したがって、『吾妻鏡』は『平家物語』或いはその原史料の文章を元に、天候に関するこの記述を作ったと言えよう。

同様のことが（A）の天候の記述と「曾我記」の間にも言えるのではないだろうか。つまり、天候に関する部分について『吾妻鏡』は「曾我記」の文章を利用したのであると。では、もしそうであるならば、それはどの種類の「曾我記」だったのだろうか。その場合、参考となるのが（C）の部分の「雷雨撃_レ鼓」という表現である。しかし、この「雷雨」という激しい表現と、「小雨降、日中以後霽」すなわちはじめのうちは小雨が降っていたが、日中以後は晴れ上がったという表現との間に、一種の違和感があるのは明らかである。とすれば、（A）の天候の記述の原史料は、（C）や「真名本」の原史料となった「曾我記」とは別の種類の「曾我記」であったと考えるべきであろう。要するに、（A）の部分に關して『吾妻鏡』の編纂者は、幕府に伝来した記録を基本にしつつ、各種の「曾我記」を参照し、天候については『真名本』の原史料とは別種の「曾我記」の表現を採用したということになる。

以上の検討によって、ようやく『吾妻鏡』建久四年五月廿八日条の性格・編纂方法が明らかになったと考える。すなわち、『吾妻鏡』の編纂時には、幕府に伝来した実録的性格の記録、『真名本』の元となったものと同一内容の「曾我記」、

それとはまた別の種類の「曾我記」といった複数の原史料が存在し、編纂者は、記録を基本に置きつつ、そこに各種の「曾我記」の記事や表現を取捨選択して組み合わせ、さらに史書としての体裁を整えるための特筆部分を追記するという方法によって、この記事を編纂したと結論することが出来るのである。このように考えることによって、実録風でありながら文学的傾向も著しく、また『真名本』と似ているようでありながら決して同一視することも出来ないというこの記事の性格も、はじめて整合的に理解することが出来るであろう。

第二章 『吾妻鏡』 曾我敵討事件の原史料

第一節 「曾我の雨」と「曾我記」

さて、次に問題となるのは、記事の編纂に用いられた原史料の性格、その史料としての価値である。この点について、まず、所謂「曾我の雨」を素材に検討してみたい。

周知のごとく、「曾我の雨」とは陰暦五月廿八日頃に降る雨のことである。曾我十郎祐成の愛妾「大磯の虎」の悲しみの涙にちなんで「虎が雨」とも言われる。曾我兄弟の敵討事件と五月の長雨という気象現象とが結び付いて生まれた言葉と考えられ、事件の記憶とともに人々の心の中に深く刻み付けられた。歌舞伎の「曾我物狂言」『助六』において、花川戸助六、実は曾我五郎が蛇の目傘をさして花道に出るのも、単に花吹雪を傘で受けるという趣向でなされた演出ではない。「曾我の雨」が、江戸時代の社会に広く浸透していたことの表れであると思われる。現在でも大きな辞典であればほとんど必ずこの言葉を載せているし、山間部では近年まで実際に使われていたという。そうした言葉であるから、民俗学の分野ではこの季節に行われる行事や習俗との関連で様々に論じられてきた。⁽¹⁸⁾ただ、歴史学の分野においてはほとんど問題に

されたことがなかったのではないだろうか。しかし、「曾我の雨」は曾我兄弟の敵討という歴史上の事件に関わる言葉であり、十分歴史学の研究対象となるはずである。そこで本稿は、歴史学の関心と方法に従ってこの言葉の背後にある歴史事実に対し検討を試みたい。

ところで、「曾我の雨」は、直接的には、『吾妻鏡』や『曾我物語』の「十番斬」に、激しい雨の描写があるところから生まれた言葉と言っている。たとえば、『吾妻鏡』では①の(C)の「雷雨撃鼓」という表現であり、また『真名本』では③の「ころは五月廿八日の夜半の事なれば、雨は居(沃)に居てふる」という表現である。これらは、前章で明らかにしたように、同一の「曾我記」をもとに記述された部分であった。文学的傾向が見られるのもそのためである。ただ、『吾妻鏡』にはもう一箇所天候の記述があった。①の(A)の冒頭「小雨降、日中以後霽」である。これも「曾我記」に拠る表現と考えられるが、内容的にみて「雷雨撃鼓」等と直線的につながるものではなく、したがって、両者は別々の「曾我記」に基づいて記されたとみなし得るということも前章で述べた通りである。しかし、ということは、もう一歩突っ込んで考えてみると、いずれか一方に虚構もしくは誇張が含まれている可能性がある、ということになるのではないだろうか。そうした観点から見直すと、前者の表現があまりにも劇的・文学的であるところが気にかかる。確かに、兄弟が次々と武士達を切り伏せる「十番斬」にふさわしい、緊迫感のある演出効果の大きい描写ではある。ただ、それだけに劇的で文学的過ぎないだろうかという疑問も湧いてくるのである。

果たして、建久四年五月廿八日の深夜、「雷雨」は降ったのであろうか。これは、この時期には雨が降り易い、というような漠然とした季節感によって解決される問題ではない。そこで、その年その夜の天候の様子を伝えている史料を探する必要が生じてくる。その場合、役に立つのが貴族の日記である。日記には「晴」「陰」「雨」など、その日の天候を記載するのが慣例だったからである。当時の日記としては九条兼実の『玉葉』、藤原定家の『明月記』などが残されている。しかし、残念ながらいずれも建久四年の記事の全部、或いは五月廿八日の記事を欠いている。⁽¹⁹⁾たとえば『玉葉』の場合、建

久四年は正月から四月までの記事は完備しているものの、五月は廿日条で終わっていて、その後十月に至るまで記事がないのである。ただし、全く役に立たないというわけではない。五月はおおむね晴れていて、十五日に「雨下」、十九日に「晴」「夜間小雨降」とある以外雨の記述がなく、最後の廿日条も「晴」とされている。決定的な史料とは言えないが参考にはなるであろう。

他に手懸かりとなるような史料と云えば、『吾妻鏡』建久四年六月廿日条の次の記述である。

⑧炎旱^レ涉^レ旬、民黎思^レ雨、依^レ之鶴岡・勝長壽院・永福寺供僧奉^レ仕祈雨法、為^ニ善信奉行、各遣^ニ奉書^一云々

すなわち、炎旱が長く続き、人々が降雨を待ち望んでいるので、幕府が鶴岡八幡宮・勝長壽院・永福寺の供僧等に命じて、雨乞の儀式である「祈雨法」を実施させたというのである。これによって、六月廿日以前に、東日本一帯で旱魃による被害が生じていたことがわかる。とすると、二十日ほど前のことではあるが、五月廿八日の夜も、雨が降った可能性は低いと考えることができるのではないだろうか。

無論、この考え方が成り立つためには、先ず、⑧の内容が信頼の置けるものだという前提がなくてはならない。そもそも、長雨の季節とされる五月から六月にかけて「祈雨法」⁽²⁰⁾を実施するようなことがあったのであろうか。この点について明らかにするために、「頼朝將軍記」の時代の「祈雨法」の実施状況を、貴族の日記等によってまとめたものが《表2》である。この表によれば、「祈雨法」は五・六・七月に集中的に行われていたことがわかる。すなわち、五月から六月にかけての時期は必ずしも長雨の季節とばかりは言えないのである。とすれば、⑧のように炎旱が長く続くということも十分にあり得ることであると言えよう。

また、⑧には「為^ニ善信奉行、各遣^ニ奉書^一」という記述がある。「善信」とは問注所執事三善康信の法名であり、したがって、この時の「祈雨法」の諸手続きは三善康信を中心に行われたということになる。彼は京下りの文治系官僚であり、都で行われていた「祈雨法」の手続きにも精通していたと思われる。「奉行」をつとめるには最もふさわしい人物の一人

であった。さらに、彼は問注所関係の文書や古記を収集しており、現存はしていないが、自らも日記をつけていたらしい。
『吾妻鏡』の記事は、彼の残したこうした記録や文書に負うところが大きいとされている。⁽²¹⁾とすれば、いよいよ⑧の内容の信憑性は高いと言えよう。

ただ、一つ問題となるのは冒頭の「炎旱涉旬」という表現である。「旬」とは十日間のことであるから、「炎旱涉旬」とは、文字通りに読めば「炎旱が十日間にわたった」という意味である。とすると日照りの始まりは早くとも六月の初旬ということになり、五月廿八日は雨が降っていてもおかしくないのである。しかし、《表2》に挙げた建久六年の事例から興味深いことが判明する。この事例の典拠となった『三長記』の天候の記事をまとめたものが《表3》である。その廿一日条の記述を次に挙げてみよう。

⑨微雨灑、不_レ及_二地濕_一、炎旱涉_レ旬、於_二神泉_一有_二雨乞_一云々

ここでも「雨乞」に際して「炎旱涉旬」という表現が用いられている。残念ながら、六月以前の記事が現存しないので、六月末の天候に関しては不明である。ただ、《表3》から明らかなように、七月一日から廿日まで「二十日間」も「晴」が続いている。六月末の何日かが「晴」であったとすれば、実に「二十日以上」も「晴」が続いたわけである。そして、これを受けて『三長記』の記主藤原長兼は「炎旱涉旬」と記したのであった。しかも長兼は、「微雨」が降ったにもかかわらず「不_レ及_二地濕_一、炎旱涉_レ旬」と記している。つまり彼は、少々の雨では「炎旱」に影響を与えることはないと認識していたのである。これらのことから、「炎旱涉旬」とは、単に「日照りが十日間にわたる」というのではなく、「十日以上」「二十日以上」といった長期間にわたって日照りが続き、「少雨」では「炎旱」を解消することができないような場合に用いられる表現であったことがわかる。この⑨の例に準じて⑧の記事を解釈すれば、五月廿八日の深夜、「雷雨」が降った可能性は極めて低いと考えることができるであろう。少なくとも『吾妻鏡』①の(C)や、『真名本』の③に叙述されるような激しい雨は降らなかったと言えよう。先に見た『玉葉』の五月の天候の記事も、また①の(A)冒頭の「小

雨降、日中以後霽」という記述も、これと矛盾するものではない。

以上のことから、本稿は「曾我の雨」は歴史事実としては甚だ疑わしいものであると結論する。つまり、『吾妻鏡』建久四年五月廿八日条や『真名本』の原史料の「曾我記」に描かれた雨の描写は、史実ではなく虚構もしくは誇張であった可能性が高いと考えるのである。無論これは、「曾我記」や『真名本』の文学作品としての価値をおとしめるものでは決してない。なぜ「十番斬」の場面に「雷雨」の描写がなされたかという問題は、それはそれで文学史上の、或いは民俗学上の重要な課題であることに変わりはない。しかし、史料としての価値、すなわち歴史事実をどの程度正確に反映しているかという点に関しては、あまり高い評価を与えることは出来ないということである。これは何も「曾我の雨」に限らない。同種の「曾我記」をもとに記されたと考えられる『吾妻鏡』の記事には、常に同様の疑いをもって接しなければならぬということである。ここに、原史料の史料的価値を検討する史料論の意義があると考ええる。

では、『真名本』の原史料の「曾我記」とは別の種類の「曾我記」（以下、別種の「曾我記」と記す）の場合には、どのようなことが言えるのであろうか。次節以下では、この点について検討してみたい。

第二節 「將軍」と「曾我記」

さて、『吾妻鏡』建久四年五月廿八日条（①）にはもう一つ、恐らくあまりにも些細なことであるためこれまで見過ごされてきたのであろうが、非常に注目すべき表現がある。それは（C）の次の箇所である。

⑩五郎者差御前奔参、將軍取御劔、欲令向之給（①の（C）の一部）

すなわち、屋形内に侵入してきた五郎に対し、自ら劔を取って迎え討とうとした頼朝を「將軍」と表現している箇所である。「征夷大將軍」の略称が「將軍」であるというのは常識である。したがって、前年「征夷大將軍」の地位に就いた頼朝を「將軍」と表現していることに疑問の余地はないように思われる。ところが、実はこの常識が問題なのである。なぜ

なら『吾妻鏡』では、「征夷大將軍」の地位に就いた幕府の首長に対し、「將軍」という呼称を用いることがないからである。「家」という字を添えて「將軍家」と記述するのである。

そもそも、『吾妻鏡』は、幕府の正史という性格上、その首長の呼称には非常に神経を使っている。たとえば「頼朝將軍記」では、頼朝に対し、はじめ前右兵衛佐の唐名である「武衛」の呼称を用いているが、元暦二年五月十一日条において頼朝が従二位に叙されたことが記されると、これ以後は「二品」の呼称を用いるようになる。また、建久元年、上洛した頼朝が、十一月九日権大納言に任ぜられると、ただちに「新大納言家」「大納言家」と記し、同月廿四日右近衛大将に任ぜられると、次の廿六日条より「右大將家」、さらに十二月三日これを辞すると、翌四日条よりは「前右大將家」と記述するのである。そして、これ以降は「前右大將家」もしくはその唐名である「幕下」の呼称を用いていくが、建久三年七月廿六日、征夷大將軍の除書が二人の勅使によって鎌倉にもたらされると、翌廿七日条では、

⑪將軍家令招請兩 勅使於幕府給、於寢殿南面御對面

と、さっそく頼朝を「將軍家」と表現している。そして、以後は一貫してこの「將軍家」という呼称を用いていくのである。同様のことは、頼家・実朝など他の「將軍記」においても認めることが出来る。要するに、和名ならば官職に「家」の字を添え、唐名ならばそのまま用いるというのが、幕府の首長を呼称する際の『吾妻鏡』の用語法だったと言えるのである。

尤も、「家」を伴わない「將軍」という表現が全くなかったというわけではない。しかし、それは「軍中聞將軍之令、不聞天子之詔」⁽²²⁾「海道大將軍」⁽²³⁾などのように軍指令官の意で用いられたものか、「令補將軍給」⁽²⁴⁾などのように純然たる官職の意で用いられたものであって、若干の例外を除いて、「將軍」のみで征夷大將軍の地位にある幕府の首長その人を指す用法は見られない。これらのことから、たったの一字という些細な違いではあれ、⑩に見た「將軍」という用例がいかに特異なものであったかがわかるであろう。

なぜこのようなことが起きてしまったのであろうか。『吾妻鏡』編纂者が「家」の一字を記し忘れたのであろうか。いや、そうではあるまい。なぜなら、この特異な用例がその十日ほど前の五月十六日条にも出てくるからである。同じ富士野の御狩の記事にこの用例が見られるというのは、単なる偶然ではないはずである。⁽²⁶⁾

ところで、この五月十六日というのは、前章第一節の冒頭で述べたように、「若君」頼家が初めて鹿を射止めた記念すべき日であった。ただ、その頼家の鹿獲りの記述は意外なほど短く、事実のみを述べた実録風のもので、記事の大半は、頼家が鹿を射た場所で行われた「山神」を祭る「矢口の祭」の叙述に当てられている。これは『真名本』にはない『吾妻鏡』独自の記事である。先ず、「可然射手」工藤庄司景光・愛甲三郎季隆・曾我太郎祐信の「三口」が召し出され、次いで「陪膳」役の梶原源太左衛門尉景季・工藤左衛門尉祐経・海野小太郎幸氏が、黒・赤・白三色の「矢口餅」を頼朝の前に並べて置く。儀式はこうして厳かに始まるのである。次にその主要部分を挙げてみよう。

⑫先景光依_レ召参進、蹲居取_レ白餅置_レ中、取_レ赤置_レ右方、其後三色各一取_レ重之、(黒上、赤中、白下)、置_レ于左臥木之上、是供_レ山神云々、次又如_レ先三色重_レ之、三口食_レ之(始中、次左廉、次右廉、發_レ矢叫聲、太微音也、次召_レ季隆、作法同_レ于景光)

すなわち、一人目の工藤景光が頼朝の召しによって御前に進み、取り重ねた三色の矢口餅を臥木の上に置いて「山神」に供え、次いで自らも食して微かな声で「矢叫聲」をあげた。これは、狩獵の場で「射手」が「山神」と「共食」し、「山神」に感謝するとともに「山神」を讃える儀式である。二人目の愛甲季隆も景光の作法にならった。そして、問題の「將軍」という表現は、三人目の曾我祐信の所作のところにでてくる。

⑬次召_レ出祐信仰云、一二口撰_レ殊射手賜_レ之、三口事可_レ為_レ何様哉者、祐信不能_レ申_レ是非、則食_レ三口、其所作如_レ以前式、於_レ三口者、將軍可_レ被_レ聞召_レ之趣、一旦定答申歟、其礼有_レ興之様、可_レ有_レ御計_レ之旨、依_レ思食儲、被_レ仰含_レ之處、無_レ左右令_レ自由_レ之條、頗無念之由被_レ仰云々

これによれば、祐信を召し出した頼朝が「一・二口目の矢口餅は殊にすぐれた射手を選んで与えたが、三口目の餅についてはどうしたらよいだろうか」と尋ねたところ、祐信はその真意を理解することできず、前の兩人と同様の所作でさっさと食べてしまった。しかし、頼朝の方では「三口目の餅は將軍がお召し上がり下さい」と祐信に答えさせ、自分自身もこの儀式に加わって興を添えたいと思っていたので、祐信のこの勝手な振舞いを非常に残念がった、というのである。

一読して気付くのは、この「將軍」という表現が全く違和感なく用いられているということである。「將軍家」という「吾妻鏡」の通常の用法を意識していなければ、見落としてしまうぐらいに自然である。それは、この文章が実録風ではなく、むしろ文学的であるという理由によるものと思われる。⑫を見てもわかるように、概してこの「山神・矢口祭」の文章は描写が詳細で、また⑬のように直接話法を用いるなど文学的傾向が強い。本来であれば、より詳しく丁寧に記述されるべき頼家の鹿獲りの記事が、簡潔に事実のみを述べる実録風の文章であるのと対照的である。

さらにまた、記事の関係者が「真名本」の登場人物とほとんど重なり合うという点も注目値する。すなわち、工藤祐経は兄弟の仇敵、曾我祐信は兄弟の継父、梶原景季は父景時とともに兄弟に敵対する人物である。愛甲季隆は「二十番の巻狩」の「一番」の射手として登場し、海野幸氏は巻狩に名を連ねるばかりでなく、三原・長倉の御狩では梶原景時と連歌を詠んで優賞⁽²⁸⁾されている。また、この兩人は「十番斬」の場面では兄弟との切り合いをも演じている。⁽²⁹⁾ その名が見えないのは工藤景光のみである。こうした登場人物の一致も、偶然に生じたものとは思われない。これらのことから、五月十六日条の「山神・矢口祭」の記事は、幕府に伝来した記録ではなく、何らかの「曾我記」に基づいて作られたものと見て間違いない。しかし、先にも述べたように、エピソード自体は「真名本」に見られないものであった。⁽³⁰⁾ とすれば、「真名本」の原史料の「曾我記」とは別種の「曾我記」に基づいて記述されたものということになる。要するに、別種の「曾我記」では頼朝のことを「將軍」と称しており、「山神・矢口祭」に「將軍」という表現が出てくるのも、「吾妻鏡」が別種の「曾我記」を原史料として記述したためと考えることができるのである。

では、⑩の「將軍」の場合はどのように考えればよいのであろうか。⑩は①の(C)の一部であり、『真名本』の原史料の「曾我記」に基づく部分である。前章第二節で、⑩の部分に対応するとした『真名本』の④は頼朝を「鎌倉殿」と記していた。ここからもわかるように、『真名本』では頼朝のことを「鎌倉殿」と表現しているのである。他には「君」⁽³¹⁾と表現することもあるが、「將軍」「將軍家」という語を用いることはほとんどない⁽³²⁾。これは恐らく、原史料の「曾我記」でも頼朝を「鎌倉殿」「君」と表現していたからであろう。しかし、こうした呼称が『吾妻鏡』の文章になじまないことは言うまでもない。とすると考えられるのは、『吾妻鏡』の編纂時に、原史料の緊迫感のある文学的效果を損なわず、しかも他の記事と違和感なくつなげるために、「將軍家」と一字しか違わない別種の「曾我記」の「將軍」という表現を借用してきたということである。以上のことから、五月廿八日条の(C)と五月十六日条の「山神・矢口祭」に、『吾妻鏡』では極めて特異な「將軍」という表現が用いられているのは、原史料となった別種の「曾我記」が頼朝を「將軍」と称していたためであると考ええる。

しかし、それにしても、中世において頼朝のことを「將軍」と称し、記述するということが実際にあったのであろうか。というのは、よく知られているように、頼朝は他の「將軍」と異なり、「右近衛大将殿」「右大将家」などと呼ばれるのが慣例だったからである。『御成敗式目』第七条の事書で、「右大将家以後代々將軍并二位殿御時」と、頼朝を頼家・実朝や尼將軍政子と区別して「右大将家」と記している例はあまりにも有名である。また、『古今著聞集』のような説話集でも頼朝のことを「右大将殿」と記して⁽³³⁾、実朝・頼経等の「將軍」⁽³⁴⁾と区別している。しかし、頼朝を「將軍」と記している例がないわけではない。⁽³⁵⁾たとえば『愚管抄』では、奥州合戦の頃から正治元年に没するまで、頼朝を「頼朝ノ將軍」「カマ倉ノ將軍」「頼朝將軍」「関東將軍」と表現⁽³⁶⁾している。さらにまた、時代はやや下るが、南北朝期の成立とされる『保暦間記』にも次のような記述が見られる。

⑭建久四年五月廿八日彼ノ狩野ノ居出ノ屋形ニテ祐経打レヌ。是モ分ニ隨ハデ驕リシ故也。助成・時宗等伊東入道ガ孫也。

朝敵ノ者ノ子孫トテ世ニ便宜アラバ將軍ヲモ思懸奉ラントニヤ。又遁ルマジト思ヒケルニヤ。將軍ノ假屋ニテ二人ノ者戦ヲス。助成ハ新田ノ四郎ガ手ニ懸テ打レヌ。時宗ハ被捕テ被誅了ヌ。是ヲ曾我物語ト申ス。

ここでも、二度にわたって頼朝を「將軍」と記しているのである。しかし、⑭で最も注目すべきは「是ヲ曾我物語ト申ス」としている箇所であろう。ここから、⑭が何らかの「曾我物語」に基づいて作られた記事であることがわかる。ちなみに『保暦間記』では、頼朝のことを記す時、「頼朝」という実名を用いることがほとんどで、他には「兵衛佐頼朝」「源二位」「大將殿」「前右大將頼朝」という表現が若干見られる程度である。「將軍」というのは⑭の中に見える二例のみである。とすれば、この「將軍」という表現は、まさしくここに言う「曾我物語」の表現を、そのままの形で用いたものであると言えよう。そして、その「曾我物語」こそ、別種の「曾我記」もしくはその発展した真名本系『曾我物語』であった、とみなすことができるのではないだろうか。

以上の検討によって、別種の「曾我記」の文章表現上の特徴や位置付けが、わずかながら明らかになってきた。では、その内容上の特徴、史料としての価値はどのようなものだったのだろうか。最後に、この点について、もう少し詳しく検討してみたい。

第三節 「山神」と「曾我記」

先ず、考察の糸口として、前章第一節の冒頭でも触れた五月廿七日条の「工藤景光の怪異」について検討してみたい。工藤景光は『真名本』に名前の見えない人物で、この記事も『吾妻鏡』独自のものである。事件は、頼朝の「御駕前」に突然「無双大鹿」が走り出てきたことに始まる。折しも「御馬左方」にいた景光は、「此鹿者景光分也、可射取之由」を願い出て許された。そこで景光は、一同が「扣し駕見」守る中、鹿を弓手に見なしつつ一の矢を放った。ところが、矢は鹿に当たらず「一段許」も手前に落ちてしまった。続けて二の矢・三の矢を放つが前と同じである。本の山に逃げ込ん

でいく鹿を呆然と見送って、思わず景光はこう言った。

⑮景光奔_レ弓安_レ駕云、景光十一歳以来、以_二狩獵_一為_二業_一、而已七旬餘、莫_レ未_レ獲_二弓手物_一、而今心神惘然太迷惑、是則為_二山神駕_一之條無疑歟、運命縮畢、後日諸人可_二思合_一云々

すなわち、自分は十一歳の頃から「狩獵」を「為業」で七十余年になるが、いまだかつて弓手の獲物を仕留められなかったことはない。それなのに今は前後不覚の状態になって射損ねてしまった。これはあの「無双大鹿」が「山神駕」であったからに違いない。自分の運命も縮まった。後日皆で思い合わせてほしい、と。人々も奇異の思いを抱いていたところ、その言葉通り、晩に及んで景光は病を得て倒れてしまった。これを受けて頼朝は、

⑯仰云、此事尤怪異也、止_レ狩可_レ有_二還御_一歟云々、宿老等申_二不可_レ然之由_一、仍自明日_二七ケ日可_レ有_二卷狩_一云々

つまり、これは確かに怪異である、御狩を切り上げて帰った方がよいだろうかと言いだしたのである。しかし、宿老等がその必要はないと進言したため、次の日から七日間にわたる巻狩が行われることになったという。敵討事件が起きたのは、まさにその翌日であった。

さて、ここに挙げた「工藤景光の怪異」は、前節で見た五月十六日条の「山神・矢口祭」と多くの共通点を持っている。第一に、両者はともに『真名本』にないエピソードである。第二に、ともに『真名本』に名前の見えない工藤景光が重要な役割を演じている。前者では、一人目の「射手」として儀式の作法の模範を示し、後者では事件の主役である。そして第三に、ともに「山神」に対する信仰と「狩獵」とを結び付け、その密接な関係を話の核心に据えている。前者は、記事そのものが頼家の初の鹿獲りを感謝して、「射手」が「山神」と「矢口餅」を〈共食〉するという話であり、後者も、長年「狩獵」を「為業」てきた景光が突然病を得て倒れたのは、「山神」の駕す「無双大鹿」をねらったがためとしているのである。さらに第四として、両者の描く頼朝像に一種の共通性が見られる。たとえば前者では、儀式に参加しようとしながら曾我祐信に肩透かしをくわされて残念がる頼朝を、後者では、景光の「怪異」を恐れて御狩を中止しようと言い出

しながら、宿老等の意見に押されて御狩を続行する頼朝を描いている。いずれも、御家人達の上に君臨する偉大な独裁者頼朝、武家政治の創始者として神聖視された頼朝ではなく、弱さや暖かみを持った人間的な頼朝である。以上の共通性から、この両者が同一の原史料によったものであることは疑いがないと言えよう。要するに、ともに別種の「曾我記」に基づいて作られた記事であったと考えることができるのである。とすれば逆に、ここに挙げた共通点が、別種の「曾我記」の内容上の特徴、史料としての価値を明らかにする拠り所となるはずである。

では、四つの共通点のうちどれに注目すればよいのであろうか。思うに、それは第三の共通点、すなわち「山神」に対する信仰と「狩獵」とを結び付けている点である。試みに、これを『真名本』と比較してみよう。

先ず「山神」についてであるが、『真名本』にも確かに、この「山神」という語は見えている。しかしそれは、巻七の富士山にまつわる「姨捨て伝説」と「かぐや姫伝説」においてのみであり、しかもそこでは五郎の口を借りて次のようなことが語られている。

①7 此山 仙人所住 明山、於其麓捨命者、何我等成仙人眷属、不^レ免^ニ修羅鬪^ノ苦患、多^ク餘業^ヲ殘^リ、此世^ニ依^テ仙人値遇^ノ結縁^ニ、富士郡不^レ成^ニ御靈神^ト、又我等本意、自^ラ本報恩^ノ合戦、謝徳^ヲ鬪^ノ苦患、山神何^モ可^レ無^ニ納受^ス

すなわち、仙人所住の富士の麓で命を捨てるのならば、仙人の眷属となつて修羅鬪の苦患を免れ、仙人値遇の結縁によつて富士郡の「御靈神」となるだろう。また、父の敵を討つというのは報恩の合戦、謝徳の鬪であるから、「山神」も必ずやこの本意を遂げさせてくれるだろう、というのである。ここでの「山神」は、敵討という行為の正当性、敵討の成功を保証する神であり、その信仰は兄弟を「御靈」に祭る精神的背景として機能している。同じ「山神」に対する信仰でも、別種の「曾我記」のものとは若干趣を異にしていると言えよう。尤も、この両伝説は『真名本』の中に散見する唱導的説話の一種であり、安居院流の唱導僧か、或いは浄土宗鎮西流名越派の僧侶の制作かと指摘されているものである。したがって、「山神」を「狩獵」と結び付ける意識は、最初からあるはずもなかったと言えるかも知れない。

では、「狩獵」について『真名本』はどのような叙述をし、そこからどのような意識を読み取ることができるのであるのか。「山神」とは違って「狩獵」に関わる記事は、『真名本』もさすがに豊富であるように思われる。それ故、これまでの『真名本』研究では、「狩庭」の重要性ということがしばしば指摘されてきた。⁽³⁹⁾しかし、兄弟の父河津三郎祐通が討たれた伊豆の奥野の狩倉をはじめ、建久四年の三原・長倉・那須野・富士野など一連の「狩庭」の叙述を検討していくと、鹿を射る、猪を射るといった「狩獵」行動について具体的に描写した場面は、意外に少ないことがわかる。奥野の狩倉で山内瀧口三郎経俊が熊を射る場面、⁽⁴⁰⁾富士野で兄弟が大鹿を故意に射はず場面、⁽⁴¹⁾新田四郎忠経が大猪を退治する場面⁽⁴²⁾らである。記事の量が豊富であると感じるのは、一つには「二十番の巻狩」の場面が入っているからであろう。しかし、そこでの叙述の重点が「狩獵」行動にあるとは思われない。一番の射手である愛甲季隆の例を次に挙げてみよう。

⑮ 一番 相模国住人愛敬三郎、本間次郎出、愛敬三郎其日装束、下師子牡丹織物小袖、上嶋摺松原に飛、鶴直垂、大斑行膝、生絹裏打、竹笠谷風、⁽⁴³⁾一覽、以鶴本白作、⁽⁴⁴⁾借深(染)太鹿矢、⁽⁴⁵⁾氣装簾弓、真中取、鶴毛馬乗、⁽⁴⁶⁾黒鞍置一任、自左岳出来、⁽⁴⁷⁾(中略)斯處自三峰七烈鹿下、⁽⁴⁸⁾先三留、⁽⁴⁹⁾愛敬三郎、⁽⁵⁰⁾残三留、⁽⁵¹⁾本間次郎、⁽⁵²⁾二遁出、⁽⁵³⁾駿河国住人船越・木津輪人々、⁽⁵⁴⁾中留、⁽⁵⁵⁾

一読してわかるように、叙述の重点は「狩獵」行動そのものではなく、射手のその日の狩装束にある。これをいかに華やかに美しく描写するかという点が重要なのである。二番以下の射手についても、叙述の仕方はほとんど同じであり、それが二十番、総勢四十人にわたって延々と続くのである。それはあたかも一幅の絵巻物のように、美しくまた様式的である。

同様に、「狩獵」と直接には関係のないエピソードや記述が、しばしば「狩庭」の記事を彩っている。それはたとえば、俣野景久と河津祐通の相撲など「狩庭」で行われた武士達の相撲の叙述や、梶原景時と海野幸氏の連歌の名誉譚、⁽⁴⁵⁾宇都宮朝綱の女房の名誉譚などのエピソードであり、また、「その夜は入間河の宿にて竟夜ねらへども、仙波・河越・金子・村

山の人々用心禁しくして君を守護し奉れば、少しの隙こそなかりけれ⁽⁴⁷⁾などと、祐経をつけねらう兄弟の姿を様式的な表現で執拗に繰り返す箇所などである。これらはいずれも、基本的に「二十番の巻狩」と相通ずるものである。要するに、『真名本』が意図していたのは「狩庭」に参加した武士達の名前を一人一人挙げ、その姿を勇壮に、また美しく読み手に指し示すことであり、さらにはそのような武士達が「君」頼朝を「守護し奉る」鎌倉幕府の〈体制〉の中で、容易に目的を達し得ない兄弟の苦難を印象付けることだったのである。そこには「狩獵」行動そのものを描写しようとする意識、ましてやそれを「山神」に対する信仰と結び付けようとする意識などは見られない。

その中であって、唯一、「山神」との関係がうかがうことができる事例は「新田四郎忠経の猪退治」である。これは、頼朝の前におどり出た「猪の大王」を、新田忠経が馬乗りになって腰刀で倒すというエピソードである。先の「工藤景光の怪異」と同じく敵討の前日に配され、また「無双大鹿」と同じく猪を「猪の大王」と表現している。そのため、これまでもしばしばこの二つのエピソードは対比され、その類似性が指摘されてきた。しかし「新田忠経の猪退治」では、忠経の一挙一動の描写が詳しいわりに、猪については「猪の大王」と記すだけで、「工藤景光の怪異」の「山神駕」のように「山神」という表現をとらない。したがって、この場合も叙述の重点は「狩庭」における忠経の武勇に置かれ、「山神」に対する意識は後退していると言える。「山神」という語があるかないかの相違については、もっと注意されてしかるべきであろう。

無論、文学作品として『真名本』を評価する場合、「狩庭」というのは決して軽視すべき要素ではない。先ず兄弟の敵討を動機付け、次いで鎌倉幕府という〈公の体制〉の確立と、その中で敵討を行わねばならぬ兄弟の苦難を印象付け、最後にはその敵討を華やかにかつ壮絶に演出する、なくてはならない舞台装置である。「狩庭」の仇を「狩庭」で討つというのは、作品に通底する一つの重要なテーマであると言えよう。しかし、それはあくまで文学的な「狩庭」であって「狩獵」そのものではない。

これに対して、「山神・矢口祭」や「工藤景光の怪異」の記事、すなわち別種の「曾我記」が描くものは武士の名前でもその名誉でもない。また、頼朝を頂点とした鎌倉幕府の堅固な〈体制〉でもない。「射手」が「山神」と「矢口餅」を〈共食〉して「山神」に感謝するという儀式であり、「山神」の駕す「無双大鹿」をねらったがために起きた恐るべき「怪異」である。これらのことから、「狩獵」を「業」とする者、所謂「狩獵者」の「山神」に対する感謝の念・畏敬の念こそ、別種の「曾我記」の内容上の特徴とみなすことができる。と考える。

では、なぜ別種の「曾我記」はこのような特徴を備えるに至ったのであろうか。そもそも、「狩獵者」はなぜ「山神」に感謝し、「山神」を畏れ敬わなくてはならなかったのであろうか。獵師の習俗に関する民俗学的な研究⁽⁴⁸⁾によれば、それは一つには、「狩獵」が人と野獣との生命をかけた一対一の真剣勝負であり、「狩獵者」は絶えず自らの生命を危険にさらさなくてはならなかったからであるという。そのため彼等は、山に入る前に獵の成功を「山神」に祈念し、獲物を得て無事に帰ることができると、それを「山神」に感謝するのを常とした。また、一つには、「狩獵」は必然的に血のケガレ・死のケガレを生ずるものであり、さらに、殺されて死霊となった動物に怨まれ祟られるという恐れがつきまとうものだったからでもある。そこで彼等は、そのケガレをハライ、死霊を鎮めるためにも「山神」を「狩獵」の神として祭る必要があったのである。

こうした「狩獵者」特有の感覚や信仰は、しかし、民俗学の対象となる近代の獵師の社会ばかりでなく、中世の狩獵神事、たとえば『諏訪大明神画詞』⁽⁴⁹⁾に描かれる諏訪社の「御狩押立神事」「五月会」「御射山祭」などにも認めることができる。この史料は南北朝期延文元年頃の成立とされているが、神事の様子それ自体は平安期から鎌倉初期のものと同じであったと言われている⁽⁵⁰⁾。とすれば、別種の「曾我記」は、そうした狩獵神事に携わる「狩獵者」によって生み出され、伝承されたものであったと考えることができるのではないだろうか。

ところで、近年「武士論」の研究が盛んに行われているが、その契機となったのは、ここに挙げた諏訪社の狩獵神事の

研究であつた。そこでは、信濃国の一宮諏訪社の「五月会」「御射山祭」などにおいて、国内の地頭御家人が頭役を勤仕していたこと、幕府も勤仕者には鎌倉番役を免除するなど特別な配慮を加えていたことが明らかにされた。同様の現象は諸国の一宮にも見られ、一国に及ぶ神事の頭役勤仕や、その一環として行われる流鏑馬などの軍事的儀式的奉仕は国内の地頭御家人の所役であり、守護を通じて幕府がこれを実質上主宰していたという。地頭御家人がこうした所役に従つたのは、彼等が、工藤景光のように「狩獵」を「業」とし、「武芸」を職能とする存在だったからである。以上のことから、別種の「曾我記」を生み出した「狩獵者」というのも、単なる「獵師」ではなく、「狩獵者」としての「地頭御家人」であつたと考えるべきであらう。⁽⁵²⁾

元来、地頭御家人のような武士達は、常日頃から「狩獵」に親しみ、戦場にあつては「狩獵」で鍛えた「武芸」を以て、生命をかけた一対一の真剣勝負を行う存在であつた。彼等は、貴族や僧侶と異なり、血のケガレ・死のケガレにまみれることを厭わない。しかしまた、それが故に、「狩獵」の神である「山神」に対しては並々ならぬ切実な感覚・信仰を持っていたと思われる。それは「狩獵」を一幅の絵巻物に仕立て上げるような、文学的に洗練された感覚とは明らかに異質である。もっと自らの本性や生活に根差した素朴な感覚であり、信仰であつたと言えよう。

とすれば、そのような地頭御家人によつて生み出され伝承されたと考えられる別種の「曾我記」は、富士野の御狩と敵討という、「狩獵者」である武士の社会にまさに特有な事件の本質的部分を、思ひのほか正確に伝えていると言えるかも知れない。これこそ別種の「曾我記」の史料的价值に他ならない。勿論、そこに描かれたことすべてが史実であるとは思われない。創作・伝承の過程において、脚色や増補も行われたことであらう。そうした点については、今後もう少し精密に検討していく必要がある。しかし、事件の本質とその背景となる武士社会に関しては、歴史の史料として評価すべきところがかなりあるのではないかということである。

以上の検討によつて、別種の「曾我記」の内容上の特徴、史料としての価値が明らかになったと考える。

むすび——『吾妻鏡』の立場——

さて、『吾妻鏡』建久四年五月廿八日条の(A)が、「いつ」「誰が」「どこで」「何をしたのか」明記する実録的な部分であるということは、第一章第二節で述べた。しかし、その際「どこで」の部分の表現、つまり工藤祐経の討たれた「富士野神野御旅館」という表現が、『真名本』とは若干異なっているという点については敢えて触れなかった。『真名本』ではここは、静岡県富士宮市内の地名「井出」を冠して「富士野のすそ井出の屋形」と表現しているところなのである。この両者の違いは、一見、「神野」と「井出」という単純な地名の取り違いによるものかとも思われる。しかし、「神野」の方は「井出」と異なり、静岡県内に比定できるような古地名が見当たらない。したがって、ここでは地名と考えるよりも、『真名本』の「すそ(裾野)」に対応する一般的な表現と解釈した方が妥当であろう。とすると、『吾妻鏡』は富士の裾野を「神野」、すなわち「神のまします聖なる野」と表現したということになる。⁽⁵³⁾これは富士の裾野が「狩庭」であったことを考え合わせると、「狩獵」の神としての「山神」を讀えた表現とも解釈できる。いかにも別種の「曾我記」に出てきそうな表現である。或いは、天候に関する記述同様、これも別種の「曾我記」から借用してきたものであるかも知れない。とすれば、「山神・矢口祭」「工藤景光の怪異」、そして五月廿八日条の「王藤内」に関する部分とあわせて、『吾妻鏡』はかなりの部分を別種の「曾我記」に基づいて記していたということになる。ここに『吾妻鏡』の立場というものを認めることができる。本稿は、『吾妻鏡』が、幕府に伝来した記録類、『真名本』の原史料の「曾我記」、さらには別種の「曾我記」の記事や表現を取捨選択しつつ、曾我敵討事件の記事を編纂したということを明らかにしてきた。無論、編纂に際して幕府が最も重視したのは残された記録類だったであろう。しかし、これは事実のみを簡潔に記したもので、富士野の巻狩や曾我兄弟の敵討という大事件を記述するには十分ではなかったと思われる。そこで、それを補うために用いられたのが各種の「曾我記」であった。そしてその際、記録類に次いで重視したのが、文学的に洗練されつつあった『真名本』の

原史料の「曾我記」ではなく、「狩獵」を「業」とし、「武芸」を職能とする武士の感覚や信仰を生々しく伝えている別種の「曾我記」だったのである。「吾妻鏡」は、やはり、鎌倉武士の立場に立って描かれた鎌倉武士の歴史書であったといふことである。

注

- (1) 戦前の研究としては、柳田国男氏「曾我兄弟の墳墓」(『日本及日本人』六五二、一九一五年)、同氏「老女化石譚」(『郷土研究』四五・六、一九一六年)、折口信夫氏「日本文学の唱導的発生」(『日本文学講座』、一九二七年)、山岸徳平氏「仇討文学としての曾我物語」(『日本文学聯講』二期、一九二七年)、荒木良雄氏「曾我物語三遷論」(『古典研究』六一〇、一九四一年)、能勢朝次氏「貞和時代の曾我物語」(『国語国文学研究』一〇、一九四二年)、角川源義氏「曾我物語の発生」(『国学院雑誌』四九一、一九四三年)等がある。戦後に刊行された単行本としては、角川氏の諸研究『妙本寺本曾我物語』(角川書店、一九六九年)、『語り物文芸の発生』(東京堂、一九七五年)、福田晃氏「軍記物語と民間伝承」(岩崎美術社、一九七二年)、村上學氏「曾我物語の基礎的研究」(風間書房、一九八四年)、村上美登志氏「中世文学の諸相とその時代」(和泉書院、一九九六年)等が重要である。また論文には、福田氏の「曾我語りの発生(上・中・下)」(『立命館文学』三三九・三三三・三三七・三三九、一九七二・一九七六年)、『曾我物語』覚え書き——その成立時期をめぐって——(『立命館文学』四〇三・四〇五、一九七九年)、『曾我物語(真名本)の王権・反王権(上・下)」(『日本文学』一九八六年四・五月)、『真名本曾我物語の語り物的性格卷八「祐経を射んとせし事」を中心に」(『論究日本文学』四九、一九八六年)、『曾我語り』の世界(上・下)——真名本曾我物語の原風景——(『文学』一九八九年五・六月)、『解説』(『東洋文庫四八六「真名本曾我物語」平凡社、一九八八年)、『狩の聖地の精神風土——曾我御霊発生の基層とかかわって——』(『説話・伝承学会編「説話異界としての山」翰林書房、一九九七年)等の一連の研究のほか、森山重雄氏の「在地者の贖罪——『曾我物語』の意味するもの——」(『思想の科学』一七、一九六三年)等の研究、稲葉二柄氏の「『曾我物語』と『曾我説話』」(『中世文学研究』一、一九七五年)、『曾我物語の説話形成——真名本卷九における頼朝像と五郎時宗像』(『中世文学研究』四、一九七八年)等の研究、山西明氏の「真名本『曾我物語』と安達氏——その成立に関連して」(『和歌と中世文学』一九七七年)、『曾我物語在地性の変容と保持——畠山氏説話を中心として』(『国語と国文学』一九八四年二月号)等の研究、山添昌子氏の「真名本『曾我物語』の性格及び作者像」(『国文』四九、一九七八年)等の研究、大津雄一氏の「真名本『曾我物語』の狩場をめぐって」(『日本文学』一九八一年十一月)、『体制的にかつ反体制的に——真名本

『曾我物語』のストラテジー」(『日本文学』一九八七年七月号)等の研究、山下宏明氏の「鎮魂の物語としての『曾我物語』」(『名古屋大学文学部研究論集』文学三〇、一九八四年)等の研究、刑部久氏の「『曾我物語』の年・月・日・時記事の整理と比較(前・後)」(『古典遺産』三九・四〇、一九八八年)、大川信子氏の「真名本曾我物語と平家物語——巻九五郎尋問の場の構築をめぐる」(『常葉国分』一四、一九八九年)、「真名本『曾我物語』研究——梶原氏概観」(『常葉国文』二〇、一九九五年)等の研究、會田実氏の「真名本曾我物語の〈公〉と〈私〉と——表現構造探求のために」(『日本文学』一九九〇年九月)、「真名本曾我物語」の中の東国と頼朝——作品構造との関わりの上で」(『中世文学研究』一九、一九九三年)等の研究、水谷亘氏の「真名本『曾我物語』の狩場についての一考察」(『同志社国文学』三六、一九九二年)、二本松康宏氏の「真名本『曾我物語』宇都宮河原崎遼近譚の形成」(『伝承文学研究』四三、一九九四年)等の研究、小林美和氏の「真名本『曾我物語』覚書——〈御霊〉と〈罪業〉をめぐる」(『帝塚山短期大学紀要』三三、一九九五年)等がある。他にも貴重な研究成果が多数報告されているが、紙数の関係で、代表的な研究者のごく一部の論稿にしぼって掲げたことを断っておきたい。

(2) 前掲注(1)の角川氏の著書・論文等参照

(3) 前掲注(1)の福田氏の著書・論文等参照

(4) 三浦周行氏「曾我兄弟と北条時政」(『歴史と人物』東亜堂書房、一九一五年、ただし一九八二年岩波書店刊行の『日本史の研究新編二』所収)、石井進氏「中世武士団」(小学館、一九七四年)、五味文彦氏「吾妻鏡の方法」(吉川弘文館、一九九〇年)

(5) 『吾妻鏡』に関する研究には八代国治氏「吾妻鏡の研究」(明世堂書店、一九一三年)、和田英松氏「吾妻鏡古写本考」(『国史説苑』、明治書院、一九三九年)、平田俊春氏「吾妻鏡と六代勝事記」(『歴史地理』七三四、一九三九年)、同氏「六代勝事記をめぐる諸問題」(『金沢文庫研究』一二六―一三〇、一九六六年)、同氏「吾妻鏡編纂の材料の再検討」(『日本歴史』四八六号、一九八八年)、佐藤進一氏「吾妻鏡の原史料の一つ」(『史学雑誌』六一九号、一九五二年)、益田宗氏「吾妻鏡のものは吾妻鏡にかえせ」(『中世の窓』七号、一九六〇年)、同氏「所謂『吾妻鏡断簡』について」(『日本歴史』一七九号、一九六三年)、同氏「吾妻鏡の本文批判のための覚え書き」(『東京大学史料編纂所報』六号、一九七二年)、同氏「吾妻鏡の伝来について」(『論集・世の窓』、吉川弘文館、一九七七年)、石井進氏「吾妻鏡の欠巻と弘長二年の政治的陰謀(?)」(『中世の窓』八号、一九六一年)、笠松宏至氏「吾妻鏡と追加法と」(『中世の窓』八号、一九六一年)、野口武氏「吾妻鏡の編纂技法」(『国学院大学紀要』一号、一九六九年)、石田祐一氏「吾妻鏡頼朝記について」(『論集・中世の窓』、吉川弘文館、一九七七年)、五味氏前掲書等がある。八代氏は、前三代と後三代の記事の内容・文章が異なること、「実朝將軍記」元久二年六月廿二日条に北条政村を「左京兆」と記していることから、前三代の「將軍記」は、政村が左京兆であった文永二年から出家する文永十年までの間に、政村や北条時宗

によって編纂されたと推定された。しかし、益田氏は、政村の極官は左京兆であるから、文永以後も左京兆と言えば政村をさしたと主張された。五味氏も益田説を支持された上で、『吾妻鏡』は十三世紀末頃、金沢氏の手によって編纂されたという説を提出されている。以上の他に、『吾妻鏡』を用いて『曾我物語』の内容や人物について考察した研究として、亀田帛子氏の『吾妻鏡』と中世物語（双文社出版、一九九四年）がある。

(6) 「頼朝將軍記」の特異性については、諸氏も一様に指摘されているところである。

(7) 『吾妻鏡』建久四年三月廿一日条。以下、年月日のみを示して史料を挙げているものはすべて『吾妻鏡』からの引用である。

(8) 『真名本』巻九。『真名本』は角川源義氏編『妙本寺本曾我物語』（角川書店、一九六九年）を用い、読み下しについては東洋文庫の『真名本曾我物語』（平凡社、一九八八年）を参照した。

(9) 源義経は『吾妻鏡』の文治五年閏四月卅日条、北条時定は建久四年二月廿五日条、安田義定は建久五年八月十九日条、安田義資は建久四年十一月廿八日条、佐々木定重は建久二年五月廿日条に同様の形式の記事がある。佐々木定重の例を挙げておく。

左兵衛尉源朝臣定重

佐々木源三秀義孫 左衛門尉定綱二男

年月日任

以上は「頼朝將軍記」の例であるが、同様の記事は他の「將軍記」にも若干ながら見られる。

(10) 『真名本』巻九

(11) 『吾妻鏡』貞永元年十二月五日条によれば、北条泰時が政所に保存されている文書・記録類の整理を命じている。

(12) 『吾妻鏡』治承四年五月十五日・十六日・十九日条等。この記事については前掲注(4)の五味氏の著書に指摘がある。他にも東大寺再建の供養のため、建久六年三月から六月にかけて頼朝が上洛した際の記事に天候の記述が見られる。たとえば、供養当日の三月十二日条、大仏殿に参詣した同月十三日条、石清水八幡宮に参詣した四月十五日条、天王寺に参詣した五月廿日条などである。ただし、天候の記述は頼朝の在京中に限られ、上洛・下向の途中には見られないことから、これらの記事は頼朝の諸寺社参詣を見聞した貴族の日記に基づいて記されたものと考えることができる。

(13) 頼朝の上洛・関東下向の期間にあたる『吾妻鏡』建久元年十一月六日・七日・廿六日・卅日・十二月一日・二日・十四日・十六日条、それに続く頼朝の二所詣に関する建久二年正月廿八日・二月十日条、同年三月・四月の鶴岡関係の諸行事や鎌倉の火事に関する記事に天候の記述がある。この時期の記事には、しばしば「奉行行政」「為行政奉行」などの文言が見られるが、頼朝の上洛や二所詣に二階堂行政も随行していること、上洛・下向途中の記事にも天候の記述があることなどから、これらの記事は

彼の日記に基づいて記されたものと考えることができる。また、元暦元年十月六日条の「新造公文所吉書始」にも天候の記述がある。これは恐らく大江広元等の筆録に依拠したものであろう。

- (14) 『吾妻鏡』 寿永三年正月一日条「鶴岡八幡宮有御神楽」、文治四年二月十四日条「遷鶴岳宮被行問答講」、文治五年三月三日条「鶴岡法會被始行之」、建久二年二月十七日条「幕下為覽雪渡御鶴岡別当坊」、同年十一月廿一日条「鶴岡八幡宮并若宮及末社等遷宮」等において、天候の記述が見られる。

- (15) 北条政子の出産については、実朝の出産に関わる『吾妻鏡』建久三年七月十八日・八月九日条に天候の記述がある。北条泰時の元服は建久五年二月二日条に見え、ここでも「快霽」との記述がある。

- (16) 『吾妻鏡』 文治四年六月五日条「自去夜雨降、□時以後如涙（カ）、雷電聲終日不休止、戊剋洪水」、建久元年八月十七日条「甚雨、入夜暴風穿人屋、洪水頼河岸」等

- (17) 『吾妻鏡』 元暦元年二月七日条の「鴨越」に関する記事、元暦元年四月廿日条の「平重衡・千手の前」に関するエピソード

- (18) 梶谷明氏「曾我物語の民俗的基盤」（『国学院雑誌』一九六八年四月号）、上原輝男氏「曾我の雨」再考——雨と瓜と馬と——（『国学院雑誌』一九九三年十一月号）、その他前掲注（一）の角川氏の研究にも「曾我の雨」への言及がある。

- (19) 『明月記』は建久四年の記事全部を欠いている。『鶴岡社務記録』『中臣祐明記』は五月廿八日条を欠いている。

- (20) 「祈雨」「雨乞」の研究には、高谷重夫氏「雨乞習俗の研究」（法政大学出版局、一九八二年）がある。

- (21) この点に関しては前掲注（4）の八代氏・五味氏の著書参照。

- (22) 『吾妻鏡』 文治五年六月卅日条

- (23) 『吾妻鏡』 建久元年正月八日条

- (24) 『吾妻鏡』 建久三年八月五日条、その他実朝を將軍に立てた建仁三年九月十日条にも「吹挙千幡君、被奉立將軍」とある。

- (25) 『吾妻鏡』 建久四年七月十八日・廿四日・廿八日・八月二日・九日・十日条の六箇所に、例外的に頼朝を「將軍」と称する記事が見られる。ただし、これはこの六箇所に集中して現れること、内容的に相互に関連がないことから、『吾妻鏡』編纂時における何らかの誤り、行き違いによるものではないかと思われる。

- (26) 『吾妻鏡』 建久四年五月卅日条には、兄弟が母に送った書状を頼朝が読んで感動し、永く文庫に納めるよう指示したという記事があるが、ここでも内閣文庫所蔵の「北条本」は頼朝を「將軍」と記している。ただし、「前田侯爵家所蔵本」は「將軍家」と記しており、諸本の間で全く異同のない五月廿八日条や五月十六日条の場合とは、若干事情が異なるかも知れない。しかし、この五月卅日条を同様の例の一つとみなした場合、富士野の御狩・曾我敵討関係の記事の中に、この特異な用例が三例も出てく

るということになる。

(27) 『真名本』 卷九

(28) 『真名本』 卷五

(29) 『真名本』 卷九

(30) 『真名本』では、兄弟の継父である曾我祐信は富士野の御狩に参加していなかったことになっている(巻十)。したがって、頼家の鹿獲りにも全く関与していないわけである。この点も、「山神・矢口祭」と『真名本』が大きく異なるところである。

(31) 会話文の中などでは頼朝を「君」と称することが多い。また、後述することく、狩庭や宿々で、御家人達が頼朝を警護する様子を表現する場合にも「君」と記している。

(32) 「將軍家」という表現は、『真名本』巻一に二例、巻三に一例、巻九に一例ずつ見られる。「將軍」という表現は、巻一に一例、巻四に集中して四例出てくる。ただし巻四では、「右近衛大将」補任の記事の中で「將軍」という呼称を用いるなど、歴史認識の上で混乱が見られる。また、「日本秋津嶋の大將軍(巻三)」「日本將軍(巻四)」などといった表現が見られる一方、「征夷大將軍」という語は用いられず、『吾妻鏡』の厳密な用語法に比べて『真名本』の用語法は甚だ雑である。

(33) 巻二「鎌倉右大将善光寺如来の定印来迎印を拜する事」、巻五「前右大将頼朝和歌を以て判書之事」等の例がある。

(34) 実朝については、巻十五「千葉介胤綱三浦介義村を罵り返す事」の中に「鎌倉右府將軍家」と出てくる。なお、岩波書店の日本古典文学大系『古今著聞集』の頭注では、これを頼朝に比定しているが、「右府」という表現を用いている点や「和田合戦」を題材としている点から、これは明らかに実朝のことである。頼朝については、巻十六「將軍入道頼朝初めて上洛の時若女房奉行之武者に連歌の事」に「將軍入道殿」と記されている。

(35) 『平家物語』にも「征夷大將軍」移行の構想が見られるという指摘もある。とくに「延慶本」との関係についても、今後考察していく必要があるかも知れない。生形貴重氏「平家物語の基層と構造」(近代文芸社、一九八四年)、佐伯真一氏「平家物語源」(若草書房、一九九六年)、早川厚一氏「平家物語」の歴史観」(名古屋学院大学論集)三二一、一九九五年)、「平家物語」の成立頼朝と征夷大將軍」(『国語と国文学』一九九七年十一月号) 参照

(36) 「頼朝ノ將軍」という表現は巻五に、「カマ倉ノ將軍」「頼朝將軍」「関東將軍」は巻六に見える。「愚管抄」では、頼朝をその没年まで「將軍」と称しているのである。「尊卑分脈」の頼朝の注に、建久五年十月十日將軍を辞したとあることはよく知られているが、この点に関しては高橋富雄氏が疑義を表明されている(『征夷大將軍——もう一つの国家主権——』中央公論社、一九八七年)。「吾妻鏡」「頼朝將軍記」でも最後まで頼朝を「將軍家」と記しており、頼朝の將軍辞任問題はもう一度検討し直し

てみる必要があるかも知れない。

- (37) 前掲注(1)の角川氏や福田氏の著書・論文
- (38) 前掲注(1)の村上氏の著書
- (39) 前掲注(1)の福田氏・大津氏・水谷氏・二本松氏の論文等
- (40) 『真名本』巻一
- (41) 『真名本』巻八
- (42) 『真名本』巻八
- (43) 『真名本』巻八
- (44) 『真名本』巻一
- (45) 『真名本』巻五
- (46) 『真名本』巻五・六
- (47) 『真名本』巻五
- (48) 千葉徳爾氏「狩獵伝承研究」(一九六九年)『続狩獵伝承研究』(一九七一年)など一連の「狩獵伝承」に関する研究(いずれも風間書房)、同氏「たたかいたの原像——民俗としての武士道——」(平凡社、一九九一年)、武藤鉄城氏「秋田マタギ聞書」(一九六九年、慶友社)、前掲注(1)の福田氏「狩の聖地の精神風土」など。なお、本稿執筆中に福田氏の論稿に接し、教えられたところが多かった。ただ、氏の論の目的は「曾我御霊の発生」を明らかにすることであり、本稿とは若干異なる。
- (49) 『信濃史料』第六卷(信濃史料刊行会、一九五五年)
- (50) 伊藤富雄氏「諏訪上社中世の御頭と鎌倉幕府(二)」(『信濃』六二)、長野県史刊行会『長野県史』通史編第二卷中世一(一九八六年)など。
- (51) 石井進氏「中世成立期軍制研究の一視点」(『史学雑誌』七八二、一九六九年、のちに「中世成立期の軍制」として『鎌倉武士の実像——合戦と暮らしのおきて——』平凡社、一九八七年所収)、戸田芳実氏「国衙軍制の形成過程」(『中世の権力と民衆』創元社、一九七〇年)、「初期中世武士の職能と諸役」(『日本の社会史』四、岩波書店、いずれものちに『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、一九九一年所収)など。最近では中澤克昭氏「狩獵神事と殺生観の展開」(『金澤文庫研究』二九七、一九九六年)がある。

(52) さらに大胆に憶測を加えるならば、これによって別種の「曾我記」の成立事情についても、ある程度の見通しを立てることが

可能になるかも知れない。なぜなら、成立の担い手を、富士野の御狩に参加した武士、或いはその子孫、さらにはそうした武士から直接情報を得ることのできた武士などに限定して考える道筋が立てられるからである。尤も、本稿では今のところ、角川氏が箱根山に住していた「大夫坊覚明」を原『曾我物語』の作者に比定され、また山西氏が「真名本」の管理者を上野国の神人団に求められたように、具体的にそれをどの武士、どの一族と特定する用意はない。しかし、『平家物語』の原拠の一つに、「畠山物語」と呼ばれるような武士の家に伝えられた物語があったという指摘もある。とすれば、曾我敵討事件の場合も、事件後ほどなくして、武士の手により「曾我記」のようなものが作られ、武士の家に伝えられたとしても不思議はないであろう。何も作者を僧侶や貴族に求める必要はないのである。さらに、その成立時期を、事件後ほどなく、或いは十三世紀初頭にまで下らせてもいいかも知れないが、その頃と想定すれば、頼朝に対し「將軍」という呼称を用いてもさほど驚くには当たらない。また、頼朝を神聖視される以前の人間的な姿で描いている点も、むしろ当然のこととして受け止められるのではないだろうか。しかし現段階では、これらは仮説に仮説を重ねた憶測の域を出るものではない。今後の検討課題としたい。

(53) 「神野」という語が、高野山領荘園の紀伊国「神野」荘や、『神皇正統記』「嵯峨天皇」条の「美濃国神野」などのように地名として用いられている例もある。尤も、これらの場合も「神のまします野」という意で付けられた地名かも知れない。

(54) 『吾妻鏡』建久四年九月十一日条では、北条義時の「嫡男重形」泰時が小鹿一頭を射獲ったのに対し、「山神・矢口祭」のように「箭祭餅」を賜う儀式が行われたことが記されている。ここからも、別種の「曾我記」の記事が武士社会の感覚・信仰を如実に表していることがわかる。

《表1》『吾妻鏡』と『真名本』の「十番斬」人名比較

| | 『吾妻鏡』の人名 | 『真名本』の人名 |
|----|----------|----------|
| 1 | 平子野平右馬允 | 大楽弥平馬允 |
| 2 | 愛甲三郎 | 愛敬三郎 |
| 3 | 吉香小次郎 | 岡部五郎 |
| 4 | 加藤太 | 原三郎 |
| 5 | 海野小太郎 | 御所黒矢五 |
| 6 | 岡邊弥三郎 | 海野小太郎行氏 |
| 7 | 原三郎 | 加藤太郎 |
| 8 | 堀藤太 | 橘河小次郎 |
| 9 | 白杵八郎 | 宇田五郎 |
| 10 | 宇田五郎（死亡） | 白杵八郎（死亡） |

《表2》「頼朝将軍記」の時期における祈雨法の実施状況

| 年 | 月 日 | 記 事 | 出 典 |
|-----|-------|-------------------------------|-------------|
| 治承4 | 7.25 | 十三社に祈雨奉幣 | 山・玉 |
| 養和元 | 6.10 | 祈雨奉幣、ついで神泉苑にて祈雨御読経 | 吉 |
| 寿永元 | — | | |
| 2 | — | | |
| 元暦元 | 7.10 | 祈雨奉幣 | 山 |
| 文治元 | 6.28 | 祈雨奉幣 (29日・30日に雨、その後再び晴) | 玉 |
| | 7.27 | 丹生・貴布禰二社に祈雨奉幣 | 山 |
| 2 | 5.15 | 神泉苑にて祈雨御読経 | 玉・東 |
| | 6. 2 | 二十二社に祈雨奉幣 | 玉・百 |
| 3 | 5.24 | 祈雨奉幣 (6月初旬に雨、その後再び晴) | 玉 |
| | 6.25 | 祈雨奉幣 | 玉 |
| 4 | — | | |
| 5 | — | | |
| 建久元 | 6.26 | 神泉苑にて祈雨御読経 | 東 |
| 2 | 5.10 | 神泉苑にて祈雨御読経、ついで諸社・諸寺に祈雨奉幣及び御読経 | 玉・東・百・醍醐・醍要 |
| | 6.12 | 丹生・貴布禰二社に祈雨奉幣 | 玉 |
| 3 | — | | |
| 4 | 6.20 | 幕府、鶴岡・勝長寿院・永福寺にて祈雨法 | 鏡 |
| | 7.19 | 醍醐寺にて祈雨の孔雀経法 | 醍醐 |
| 5 | 7. 8 | 祈雨奉幣、ついで清滝・龍穴にて祈雨御読経 | 玉・百・東 |
| | 12.1 | 祈雨奉幣 | 仲 |
| 6 | 7.21 | 神泉苑にて雨乞 | 三・醍醐 |
| 7 | 7. 9 | 神泉苑にて祈雨御読経 | 東 |
| 8 | 潤6.19 | 祈雨奉幣 | 猪 |
| 9 | — | | |

※出典欄の略号は「山」が『山槐記』、「玉」が『玉葉』、「吉」が『吉記』、「三」が『三長記』、「仲」が『仲資王記』、「猪」が『猪隈関白記』、「東」が『東寺長者補任』、「醍醐」が『醍醐寺座主次第』、「醍要」が『醍醐寺新要録』、「百」が『百鍊抄』、「鏡」が『吾妻鏡』のことである。また、月日の欄の「—」は、その年に祈雨法が実施されなかったことを示している。

〔表3〕『三長記』建久6年7月の天候と祈雨に関する記事

| 月 日 | 記 事 |
|-------|------------------------|
| 7月1日条 | 晴 |
| 2日条 | 晴 |
| 3日条 | 晴 |
| 4日条 | (欠) |
| 5日条 | 晴 |
| 6日条 | (欠) |
| 7日条 | 晴 |
| 8日条 | 晴 |
| 9日条 | 晴 |
| 10日条 | 晴 |
| 11日条 | 晴 |
| 12日条 | 天晴 |
| 13日条 | 晴 |
| 14日条 | 晴 |
| 15日条 | (欠) |
| 16日条 | 晴 |
| 17日条 | 天候の記事なし |
| 18日条 | (欠) |
| 19日条 | 天候の記事なし |
| 20日条 | 晴 |
| 21日条 | 微雨灑、不及地濕、炎旱涉旬、於神泉有雨乞云々 |
| 22日条 | 晴 |
| 23日条 | 雨脚滂沱 |
| 24日条 | 雨降、臨夕屬晴 |
| 25日条 | 晴 |
| 26日条 | 陰雨下、入夜雷雨甚 |
| 27日条 | (欠) |
| 28日条 | 天候の記事なし |
| 29日条 | 入夜雨降 |
| 30日条 | 雨降 |